Osaka University Knowledge Archive

Title	『セメント樽の中の手紙』のドイツ語への翻訳を通じて感じたこと
Author(s)	Schäfer, Klemens
Citation	多言語翻訳 : 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』. 2013, p. 65-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61307
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

２０１５年2月１３日

『セメント樽の中の手紙』のドイツ語への翻訳を通じて感じたこと

クレメンス・シェーファー

葉山嘉樹の短編小説「セメント樽の中の手紙」は、私たちが翻訳した 20 年前に、すでにドイツ語への翻訳が行われています。１９９２年に翻訳者のユールゲン・ベルントに出版された翻訳です。この先行の翻訳について、私たちは、自身の翻訳を完成してから、初めて読みました。私たちが作成した翻訳と比べれば異なる点がいくつかあります。

まず全体として、ベルントの文章や言葉遣いはやや古めかしい印象を与えます。また、誤訳ではないかと思われる部分もあります。たとえば、第２文の「外の部分は大して目立たなかったけれど」というところで、ベルンは「外」を「外面」と解釈しました。つまり、松戸の格好に目立つところは無かったという意味で翻訳しました。しかし、自分の翻訳では、髪と鼻の下部以外に灰色のセメントが目立たなかったという意味で翻訳しています。

さらに「弁当箱」などのような日本文化の特有のものを翻訳する場合、ベルン訳は、日本文化特有のニュアンスが含まれていないドイツ語の言葉を用いています。私たちの訳では、日本文化の中での位置付けが分かるように工夫しました。

ベルンの訳の中で、とくに、女工の手紙の部分における文章の調子や格調は不適当に感じます。たとえば手紙の中に書いてある「恋人」という言葉を「婚約者」に翻訳しました。時代背景をおもんばかったのかもしれませんが、今回、私たちは、「恋人」に近い言葉で訳しています。

この『セメント樽の中の手紙』は、プロレタリア文学の一作品として知られています。ドイツではローザ・ルクセンブルクやカール・リープクネヒトたちによって主導され、プロレタリア運動が起こりました。ただ、その中では、小説ではなく手紙やマニフェストなどが主として出版されました。

また、労働者によって書かれた労働者の生活状況に関する労働者文学というものがあり、代表的な作家にオット・ヴォールゲムートやカルル・グレーンベルクがいますが、これは、日本のプロレタリア文学とは性質を異にするものです。また、彼らはドイツ語文学者以外の人にあまり知られていない作家だといえるでしょう。

なお、私個人は、日本のプロレタリア小説と似たものとして、ノーベル賞受賞者のゲアハルト・ハウプトマンの「織匠（Die Weber）」という作品を思い出します。